

# 高齢者のジェンダー特性と サクセスフル・エイジング

— 予備的検討 —

湯 川 隆 子\*

## A Preliminary Investigation of Relationship between Psychological Androgyny and Successful Aging in Old Adults

Takako YUKAWA

### 要 旨

本研究では、伝統的なジェンダー規範に固執しない両性具有的特性を有する高齢者はサクセスフル・エイジングを果たしつつあるという仮説を検討した。61歳から87歳の高齢者（男子20名、女子10名）に面接形式による調査を行った。その結果、男女とも約半数が両性性具有者に分類された。両性性具有者における加齢の状況を、健康度、生活満足度、自尊感情、経済状態および家族の状況からみた結果は、仮説を明確に支持しないまでも、これを否定するものではなかった。即ち、良好な健康状態と経済状態については両性性具有者が有意に高かったが、生活満足度および自尊感情については相対的に高いことが推察される程度であった。さらに、過去の人生についての自由回想の分析から、両性性具有者とみられる人で、現在適応的な加齢を得ている人が何人か発見できた。これらの結果について、生涯発達の視点から考察がなされた。

### 問題と目的

老年期にある人々がサクセスフル・エイジング (Successful Aging) を果たしていく上で、ジェンダーの発達がどのような影響や関わりをもっているかを検討することは、生涯発達の視点から人間発達を構想する上で極めて重要なことである。老年期の人々にとって、従来のジェンダー規範やステレオタイプに則って形成されたジェンダー特性や意識は、サクセスフル・エイジングを得るのに果たして有効に働さうるのであろうか？これが本研究の基本的な問いである。

### ジェンダーの発達における古典的理論とその再考

人は生まれたときから男か女かの性別を付与され、それに依拠して、社会から要請されるさまざまな性にかかわる発達上の目標や課題を達成することが重要かつ望ましいと考えられてきた。ジェンダーの発達を論ずる種々の理論は、ジェンダーにかかわる発達を最重要課題とみなし、そ

の発達にクリティカルとなる重大な2つの時期があるとした。それらは幼児期と思春期であった。事実、ジェンダーの発達の姿や諸相は、他の種々の能力や特性の発達に比して極めて早期にかつ強固に獲得されることが各所で確認されてきた。具体的に記述するなら、1歳頃には、自己の性別の知覚が、素朴な形ではあるが可能になること、2歳頃には、性別を基準とした初歩的な分類ができるようになること、6歳頃には、性別に沿ったジェンダーに関する外面的な次元での行動パターンや認知がほぼできあがること、さらには、思春期とそれに続く青年期には内面的な次元での発達がより深く進み、ジェンダーは、自己や人格の中核に位置づくものとして認識されるまでになること、等々である。こうした諸事実から、ジェンダーの発達は人生のかなり早い段階で達成され、完成するとみられてきた(湯川, 1983)。

以上が、従来の古典的な諸理論から導かれてきたジェンダーの発達機制・過程である。しかし、こうした当時の既存のジェンダー規範やステレオタイプに依拠したジェンダーの発達論は、やがてウーマン・リブに端を発するフェミニズムによって根底的な批判を受け、再考を強く要請されることとなった(湯川, 1979; 柏木・高橋, 1995)。この要請にこたえて、さまざまな発達心理学の研究テーマや領域で実証を伴った検討作業が次々に展開されたが、その研究対象とされたのは主に児童や青少年、成人層までであり、老年期にまで視野が及ぶものではなかった。

老年期にまで検討の手が届かなかった理由の一つには、老年を対象とした理論や視点、研究技法がまだ十分に成熟していなかったという点もあげられる。しかしより大きな理由は、当時のジェンダー規範やステレオタイプが、性別役割分業、つまり「男は仕事・女は家庭」に代表されるように、子育てと就労が生活の中心となる中年期の成人くらいまでを念頭に形作られていたことにある。その根拠は、いうまでもなく、ジェンダー規範・ステレオタイプとそれに沿った発達論が、女性はこどもを産み育て、男性は経済的にこれを支えることが人間の使命であり、望ましいあり方であるという、人間を生物学的要因あるいは生殖作用における男女の違いに基づいて概念化する発想にもとづいていたからである。

一方、フェミニズムからの点検作業は、時期を同じくして、ジェンダーの発達そのものを理論的に見直す研究を産みだしていた。その中で注目されたのが、「両性(具有)性」という概念であった(Bem, S.L., 1974, 1975)。「両性(具有)性」とは、従来男女に振り分けられてきた諸特性、即ち「男性的特性」、「女性的特性」を、男女の別なく両方を併せもち、状況に応じてこれらを使いこなせることが望ましい発達とする概念である。Bemは、この概念に基づいてBSRI(Bem's Sex-Role Inventory; 両性性尺度)という尺度を開発した。この概念と尺度は研究者の関心と呼ばれ、多くの追試研究が行われた。それらの諸研究から提示された知見は、少なくとも青年、成人世代では、「両性性」を有した人のほうが自尊感情や自己概念が高く、社会的・心理的適応が良好であるというものであった(湯川, 1995)。Bemの提唱以来、現在に至るまでこの「両性性」の概念の妥当性を巡って、種々の検証作業が持続的に行われている(Katsurada, E. & Sugihara, Y., 1999; Sugihara, Y. & Katsurada, E., 1999; 2000)。

### 老年期におけるサクセスフル・エイジングとジェンダーの発達

サクセスフル・エイジングという用語は主に老年学で用いられており、適応的加齢(上手に年

老いて良適応を得る状況)をさしている。平易に言えば、その人なりにうまく年をとることである。その要素としては、生存(長生き)、健康(傷害の除去)、生活満足度(幸福)などが含まれるとされ、身体的な適応として健康度、心理的な適応として自尊感情、不安レベル、幸福感情、生活満足度などがその指標として諸研究の俎上に上ってきた。老年学を中心に、どのような要因がサクセスフル・エイジングを導くかを明らかにすべくさまざまな検討が精力的に積み重ねられてきている(Maddox, G.L., 1987; 下仲ほか, 1991; Baltes, P.B., et al., 1998; 高橋・波多野, 1990等)。

そうした試みの中で、サクセスフル・エイジングとジェンダーの発達との関係を問う研究が発展してきている。長寿者に女性が多いことから、長寿には「女性性」が関与している可能性が推察されるが、そのことが直ちにサクセスフル・エイジングにつながるかは未詳である(下仲他, 1991)。むしろ、Sinnot, J. D. (1977, 1982)の展望にあるように、サクセスフル・エイジングに関係した人格特徴は、男女を問わず、「活動的」で「自立的」であることと、「受け身的」で「養育的」であるとする知見のほうが有力である(下仲他, 1991)。これらの諸特性は、ジェンダーの視点からみれば、前者二つは「男性的特性」を、後者の二つは「女性的特性」に含まれると従来考えられてきたものである。このことは、サクセスフル・エイジングを得る上で望まれる人格特性は、「男性性」と「女性性」を併せもつこと、すなわち「両性具有的」であることを意味している。良適応の状況のもとに加齢することは、ジェンダーの発達からいえば、「男性性」あるいは「女性性」のどちらかに焦点化して発達を遂げるのではなく、「男性性」と「女性性」の両方を兼ね備え、状況に応じてそれらを柔軟に使いこなせることであるといえる。

先述したように、既存の発達理論にもとづくジェンダーの発達とは、所与の性別に沿って、それぞれの性に付与された社会的、心理的諸特性を学習していくことであった。この見地を推し進めれば、望ましいジェンダーの発達を達成することとサクセスフル・エイジングを達成することとは相容れないこととなる。

これまでの発達理論からいえば、ジェンダーの発達が一応完成する青年期を経て、成人期に入った男女の多くは職業をもち、配偶者を得て結婚し、子どもを産み育てるという人生を送ることが望ましいとされていた。この限りにおいては、古典的理論で提供されているジェンダー役割は有効に機能するといえる。しかし、子どもが成長し、巣立っていった後の老年期には、どのような役割を果たせばよいのだろうか。人間の寿命が著しく伸びた現代において、女子が子育てを終えた後、あるいは男子が定年を迎えた後、人生の終焉を迎えるまでのかなり長い時間をどのように過ごしたらよいかについて、伝統的なジェンダー理論は何も提供できていないのである。古典的理論は、高々成人期までしか人生の課題や目標を想定していないからである。従来のジェンダー規範やステレオタイプに従って獲得されたジェンダーの発達は、幸せな老年期を保証しないのである。ここに、従来の「発達理論」に立脚したジェンダーの発達の限界をみることができる。ジェンダーの発達の見直しが要請される所以である。

サクセスフル・エイジングの達成を目標とした生涯発達の考えや理論が生まれてきた社会的背景やそれを対象とした心理学研究や諸知見については、既に各所で論じられているが、人間の寿命の伸張を歓迎し、高齢者の存在を肯定的に捉えようとするならば、人生の終焉までも見通し

た発達観の構築が是非とも必要であることは論を待たないだろう。ジェンダーの視点は、従来の発達理論の不都合さや限界を明らかにすることで、生涯発達の理論形成を推進する一つの有力なツールあるいは論拠となりうる。このことは同時に、生涯発達の視点が、ジェンダーの発達理論の再構成を促すことを意味する。サクセスフル・エイジングを達成するには、「両性具有性」を鍵概念としたジェンダーの発達理論の構築が是非とも必要といえるだろう。

以上のような問題意識に立ち、本研究では、老年期の人々におけるエイジングの様相とかれらが獲得してきたジェンダー特性との関係を問うことが主目的となる。具体的には、現在までの人生で身につけてきたジェンダー特性が、従来のジェンダー規範やステレオタイプに沿ったものであるとみられる高齢者の人々は、老齢期にある現在の生活や自己のありように必ずしも満足していないのではないか、つまり、サクセスフル・エイジングを得ることが必ずしもできていないのではないかという疑問を実証的に検討することである。

## 方 法

### (1) 調査対象者：

男女高齢者を対象に個人面接を実施した。選ばれた面接対象者は、東海地方に位置するA県内の中都市Sにある「人材派遣センター」に登録しており、本調査への協力を許諾した高齢者30名（男子；20名，女子；10名）である。対象者の性別比が偏っているのは、センターの紹介によることと、調査への許諾を条件に募られたことによるものである。年齢は61歳～87歳の範囲で、平均年齢は72歳（男子；74.1歳，女子；67.8歳）である。調査対象者は、センターの紹介で、週3日から5日程度、草取りや庭木の剪定、トイレや床の清掃、駅前の駐輪場の整理といった日常的な軽・中程度の作業や労働に従事している。ちなみに、S市は陶磁器の生産地として知られており、市民の多くは家族ぐるみで中小の生産工場や販売業に従事しているケースが多い。

(2) 面接内容：面接内容は以下の3つから構成されている。

#### 1) 調査対象者のデモグラフィック要因を問うもの

調査協力者のもつ基本的属性を以下の7点について尋ねるもの

- (1) 生年月日と年齢
- (2) 最終学歴と通算教育年数：学歴の詳細と通算何年学校教育を受けたか
- (3) 結婚の状況：結婚の有無と現在の状態（死別・離婚・別居）
- (4) 結婚生活の満足度：結婚歴のある場合、結婚生活について、他の人と比べての満足度を問う（自分の方がよい・同じ・悪い）
- (5) 職業の履歴と状況：現在までに就いた職業の履歴
- (6) 同居の状況：同居者の有無と同居者の人数
- (7) 家族状況：同居、別居の別なく、調査協力者の家族構成を問うもので、子どもの有無とその人数、孫のいる場合はその人数も尋ねた。家族のメンバーについてはその年齢・性別・続

柄、同居か別居かも尋ねた。

(8) 現在の経済状態：現在の家庭の経済状態を「非常にゆとりがある」～「非常にゆとりがない」までの5段階で問うもの。プライバシーにかかわる事項なので、強制的に回答を求めることは極力避けた。

(9) シルバー・センターでの経歴と仕事の内容

## 2) エイジングのありようを問うもの

調査協力者が現在の生活や人生についてどのように思っているか、満足しているかについて、まず「現在の健康状態」を尋ね、次いで心理的適応度をみるために、「生活満足度尺度」、「自尊感情尺度」の二つの尺度を用いた。

(Sa) 「健康状態」についての質問：以下(イ)、(ロ)、(ハ)の3点について質問した。

(イ) 現在の健康状態を、「とても良い」(5点)から「とても悪い」(1点)までの5段階で尋ね、次いで、(ロ)「医者にかかっているか否か」を尋ねた。さらに、(ハ)他の同年代と比較して自分の健康状態が「普通より良いと思う」(3点)から「普通より悪いと思う」(1点)までを3段階で尋ねた。健康状態の指標は、対象者毎に、(イ)については1点～5点、(ロ)については「医者にかかっていない場合」に2点を、「かかっている場合」は1点を与える。(ハ)については1点～3点を与えて、3つの合計点を出す。得点範囲は3点～10点になる。得点の高いほど、健康であることを示す。

(Sb) 「生活満足度尺度」(Life-Satisfaction Scale)：BerniceとNeugarten(1960)によって作成され、杉山(1996)が更年期の生活の質と栄養欠陥状態の測定調査用に改訂したものを、柴田(2001)が同じ目的で使用したのがあり、それをそのまま利用した。「毎日の仕事(家事を含む)に満足している」「気力(活力)に満ちている」など5項目について、満足の程度を「全くそう感じていない」から「そう感じている」の4段階で評定するもの。「全くそう感じていない」から「そう感じている」までに1点～4点を与える。合計得点の範囲は5点～20点である。5項目の合計得点が高いほど生活満足度が高いことを意味する。

(Sc) 「自尊感情尺度」(Self-Esteem Scale)：Rosenberg(1965)によるオリジナルを星野(1970)が翻訳したのを用いた。「自分はいくつか見どころがあると思う」「自分はまるでだめだと思う」など10項目からなり、自分の気持ちに当てはまる程度を「思わない」から「思う」までの4段階のどれかで評定するもの。得点化は、「思わない」から「思う」までに1点～4点を与える。逆転項目については、質問の意味に沿って配点を逆転させた。得点の範囲は10点～40点となり、合計得点が高いほど自尊感情が高いことを示す。

## 3) 保有しているジェンダー特性とジェンダー意識を問うもの

(Ja) 「両性性尺度」(BSRI)：調査対象者の保有しているジェンダー特性をみるものである。

心理的両性具有性を測定するために、Bem, S.L. (1974, 1975) によって開発されたもので、「男性的特生」、「女性的特性」、それとつなぎの項目として加えられた「中性的特性」各20項目計60項目すべてについて、自分に当てはまる程度を「いつもそうだ」(7点)から「全然そうでない」(1点)の7段階で評定するもの。本研究では、つなぎの「中性的特性」項目20を除いた「男性的特生」および「女性的特性」各20項目を交互に並べ替えたものを用いた(下仲ら, 1990, 1991)。得点化は、調査協力者一人一人につき、まず「男性的特性」の平均得点と「女性的特性」の平均得点を別々に算出する。「両性性」か否かの判定は、本研究の参照研究ともなっている、老年者を対象とした下仲ら(1990, 1991)の先行研究で使用されている「中央値法」に基づいた基準値(男性性: 4.20、女性性: 4.85)に従った。すなわち、一人一人の対象者について、算出された「男性的特性」平均得点と「女性的特性」平均得点を各々基準値と比べ、両平均得点いずれもが基準の中央値より高い場合は「両性性具有者」となる。「男性的特性」平均得点は基準値より高いが、「女性的特性」平均得点はそれより低い場合は「男性的特性保有者」となる。逆に「女性的特性」平均得点は基準となる中央値より高いが、「男性的特性」得点は低い場合は「女性的特性保有者」とみなされる。両得点とも基準値より低い場合は「両貧性保有者」と分類される。

(Jb)「自己の性についての自由回想」: 調査対象者のジェンダー意識を問うもので、自己の過去から現在までの人生を「男」あるいは「女」としてというジェンダーの次元で回想する聞き取り調査を実施した。『男(女)としてのあなたの人生はどうでしたか』という問いの下、「自発的会話」によって自由に語ってもらう方法をとった。自発的会話を引き出すための質問としては、「男(女)でよかったと思いますか」「男(女)でなければよかったのと思いますか」「こんど生まれ変わるとしたら、男と女のどちらに生まれたいと思いますか」の3つを用意した。

### (3) 実施方法・時期: 個別面接形式によった。

個別に調査者と協力者のみが対面できるように、S市の「人材派遣センター」内の静かな個室が用意された。調査項目は予め質問紙に印刷されたものを用意していたが、調査者が質問を読み上げ、それに対象者が口頭で回答し、調査者が書き取るという方法を原則とした。独力で回答可能な者には、質問用紙をわたし、調査者の面前で必要に応じて質疑応答をしながら、回答してもらった。多くの調査協力者は、視力と聴力の点から、正確を期したいとして、調査者による聞き取りを選択した。所要時間は各対象者につき1時間程度であった。なお、聞き取りの内容は、予め用意されていた記録用紙に極力書き取ることとしたが、調査協力者の了解を得て、全会話内容をテープに録音した。面接内容の実施は、1) 調査協力者のデモグラフィック要因を問うもの、2) サクセスフル・エイジングを問うもの(Sa)(Sb)(Sc)、ついで3) ジェンダー特性と回想を問うもの(Ja)(Jb)の順に行われた。調査期間は2002年11月25日から29日の5日間で、1日6人ずつ行われた。

(4) 面接実施者: 面接は2人の心理学研究者によりなされた。面接の仕方については、初回に、1人の面接担当者が面接を行っている場にもう1人の調査者が同席し、観察するという機会を設

けた。聞き取りに関する両者間の調整を綿密に行い、一致度を高めるよう工夫した。2人の面接調査担当者数は約2分の1ずつであった。

## 結 果

(1) **結果の整理**：結果の整理は次の手順で行われた。即ち、先述した各測定材料 (Sa, Sb, Sc および Ja, Jb) について、調査対象者毎に、記録された内容を転記し、個人票を作成した。記録不備の点や不明な点は記録されたテープをもとに補った。次いで、各調査対象者について、各測度あるいは指標毎に各々所定の整理、集計を行った。

結果の分析は、調査協力者毎に集計されたジェンダー特性 (BSRI (Ja) およびジェンダー意識をみる回想 (Jb) と、現在の生活や自分に満足しているか (Sa, Sb, Sc) との関係をみていく。具体的には以下のように進める。1) 本対象者の全般的な特徴と男女別にみた集団としての特徴を概括する。2) BSRIによって分類された「両性性具有者」の割合をみる。3) 「両性性具有者」について、かれらの健康度、生活満足度、自尊感情の高さをみる。4) 対象者の中から、典型的な事例をいくつか引き出し、素描する。

### 1) 本対象者の全般的な特徴

本対象者はS市の「人材派遣センター」に登録し、週に3日から5日程度、日常的な軽・中労働に従事して収入を得ている人たちである。対象者の居住している地域は、地理的には日本の中心部東海地方のA県内に位置する中都市で、陶器の生産・販売で知られている。採土、型作り、デザイン、絵付け、卸、運送、販売といった陶器の製造・販売にかかわるさまざまな仕事の需要があるが、製造業者のほとんどが中小企業であるため、就業者一人あたりの収入はそれほど高くない。しかし、学校教育を終えるとすぐにでも就職でき、パートやアルバイトも可能なため、共稼ぎも多い。家族の経済的レベルとしては、夫婦、子どもがともに何らかの形で就労し、共稼ぎをすることで一定程度の生活レベルを維持できるという特徴をもっている。

これらのことを念頭に、表1に示した諸点から調査協力者の特徴を概括しておく。

#### ①調査協力者の年齢：

全調査対象者の年齢は61歳～87歳までで、平均年齢は72歳である。対象者を性別で分けると、男子は61歳から87歳で、平均年齢は74.1歳 (SD=8.21) である。一方、女子は63歳から74歳で、平均年齢は67.8歳 (SD=3.77) である。本調査では、男子の対象者数が女子の2倍となっていて、年齢も男子のほうが幅広く、より高齢の人が多くいる。このようなサンプルの取り方は、先の面接協力者の項で記述したように、意図されたものではないが、エイジングに関する研究では、対象者を得るとき、総じて女子のほうに高齢者が多くいるという状況を鑑みれば、男子により高齢者が多くいるという本調査協力者の特徴は、興味深い結果を提供できる可能性をもっているだろう。

表1 調査対象者の基本属性

	年齢	性別	結婚状況	職業経歴	学歴状況	家族構成(同居人数)	子・孫(人)	経済状態	シルバー歴と仕事内容
1	67	女	4 2	公務員、製造業	9年(中学卒)	配偶者、子供夫婦(5人)	2人, 2人	1	
2	62	男	1 3	教員	16年(大学卒)	配偶者、子供夫婦(8人)	3人, 3人	5	
3	74	女	5 2	NA	9年(高等科2+専門学校1)	母親(2人)	1人, 1人	NA	(3年)、庭掃除
4	70	男	1 2	製造業、サービス業	9年(中学卒)	配偶者(2人)	3人, 6人	NA	
5	68	女	4 3	製造業	9年(中学卒)	子供夫婦(6人)	3人, 4人	NA	
6	70	女	1 1	製造業、販売業	8年(高等科卒)	配偶者(2人)	2人, 5人	NA	建具の修理
7	80	男	1 2	製造業、サービス業	8年(高等科卒)	配偶者(2人)	2人, 5人	3	(5,6年)駐輪整理
8	72	男	1 2	サービス業、事務職	8年(国民学校卒)	配偶者、子供夫婦(5人)	2人, 3人	3	S市のゴミ収集
9	64	女	1 3	製造業、事務職、農業	9.5年(中卒+高校0.5)	配偶者(2人)	2人, 3人	3	草取り、掃除、セラミック
10	66	男	1 3	農林業、製造業、公務員	11.5年(中学3+高校夜間2.5)	配偶者(2人)	2人, 3人	4	(1年)トイレ掃除
11	64	男	1 2	自営業	9年(中学卒)	配偶者、子供(4人)	3人, 2人	2	老人ホーム手伝い
12	69	女	3(独身)	農業、サービス業	9年(中学卒)	1人	0	5	(4年)裁判所清掃
13	66	男	1 2	自営業、事務職	12年(高校卒)	配偶者(2人)	2人, 5人	2	(4年)
14	61	男	1 2	事務職、サービス業、製造業	9年(中学卒)	配偶者(2人)	2人, 2人	4	(半年)計量手伝い
15	73	女	5(離婚)1	事務職、サービス業	10年(旧制女学校卒)	1人	0	3	(1年)掃除、草取り
16	63	女	4 1	製造業	9年(中学卒)	子供(3人)	2人, 0	1	
17	64	男	1 2	自営業、サービス業、事務職	12年(高校卒)	配偶者、親、子供夫婦(7人)	2人, 4人	3	草取り、公園管理
18	64	女	1 1	製造業	9年(中学卒)	配偶者(2人)	2人, 1人	3	トイレ掃除
19	78	男	4 3	製造業	6年(小学校卒)	配偶者、子供夫婦(5人)	3人, 5人	5	駐輪整理
20	78	男	1 2	農林業	9年(中学卒)	配偶者(2人)	5人, 12人	1	
21	83	男	1 1	農林業、製造業、自衛隊	10年(高等科2+青年学校1)	配偶者(2人)	3人, 5人	3	草取り
22	80	男	1 3	販売業	8年(高等科卒)	配偶者、子供(3人)	3人, 6人	3	(4年)公園管理、年賀状書き
23	84	男	1 3	製造業	13年(高等科2+青年3)	配偶者、子供夫婦(7人)	3人, 8人	3	掃除、駐輪整理
24	79	男	4 NA	サービス業	6年(小学校卒)	子供(3人)	2人, 0	1	マンション管理、清掃
25	81	男	1 3	製造業	10年(高等科2+夜間2)	配偶者(2人)	7人, 12人	2	駐輪整理
26	82	男	4 3	農業、事務職、製造業	8年(高等科卒)	1人	2人, 5人	3	清掃、駐輪整理
27	69	男	1 2	自営業、公務員、現業職	12年(高校卒)	配偶者、子供(4人)	3人, 2人	3	駐輪整理
28	87	男	1(再婚)2	事務職、製造業、農業	6年(小学校卒)	配偶者(2人)	3人, 6人	3	(12年)庭木剪定
29	76	男	1 2	農業、製造業、警備員	11年(高等科2+青年3)	配偶者(2人)	3人, 3人	3	(4年)庭木剪定、草取り
30	66	女	1 1	農業、サービス業、警備員	10.5年(高等科2+青年2.5)	配偶者、子供(3人)	2人, 2人	1	(4年)草取り



**②現在の仕事（シルバー・センターでの主な仕事）：**

現在登録している「シルバー派遣センター」での仕事の内容は、表1に示されているように、「掃除・清掃」、「駐輪場の自転車の整理」、「公園の管理」、「草取り・庭掃除」、「庭木の剪定」が主なものである。「老人ホームの手伝い」、「計量作業の手伝い」といったやや特殊な業務も含まれている。従事している仕事内容に目立った男女差は見られないが、女子に「掃除」類と「草取り」が、男子に「駐輪場の自転車の整理」、「公園の管理」、「庭木の剪定」がやや多い。

**③学歴・通算教育年齢：**

通算教育年数でみた学歴については、小学校卒の6年から大学卒の16年までかなり幅広い。平均すると9.5年、約10年となり、中学校以上となる。男女別に見ても、男子は平均9.7年、女子は平均9.2年と男子がやや高い程度で、さほど差はない。

**④職業歴：**

過去の職業歴をみると、先述した対象者の居住している地域の特徴を如実に反映したものとなっている。即ち、当地域は古くから陶器の製造・販売で知られた都市であり、対象者も何らかの形でそれにかかわった仕事に従事しているケースがほとんどである。表1の中にみられる「製造業」、「販売業」はそれを表している。「製造業」、「販売業」について、「農林業」、「事務職」、「公務員」、「サービス業」等がみられるが、数としてはさほど多くはない。目立った男女差はみられず、女子の中に職歴のない専業主婦が一人もいないことも本調査対象者の特徴として特記できる。

**⑤結婚の状況：**

対象者が結婚している（いた）か否かと、結婚している（いた）場合の、結婚生活の幸せ度を3段階で尋ねた。女子では、夫と死別した人が3名、離婚したケースが2名、独身が1名おり、夫婦健在は4名である。一方、男子では死別が3名、再婚したケースが1名のみで、あとはすべて夫婦とも健在である。男子に夫婦健在のケースが多い。結婚生活の状況は平均して2点強と「普通」である。本対象者は自分の結婚生活を、他の人と比べて「可もなし、不可もなし」と捉えているといえる。男女差を見ると、男子では平均して2.3点、女子では1.7点と、女子のほうにやや厳しい評価がみられるのは、女子に離婚者がいることと関連していると思われる。

**⑥家族の状況：**

結婚して子どもをもうけている人がほとんどで、孫に恵まれているケースも目立つ。子どもの数は2人から3人が多い。現在同居しているかどうかの状況を見ると、3世代同居をしているケースが7、配偶者と同居しているケースが13、子どもとの2世代同居が6ケース、そのほかは、母親との同居が1ケースとなっている。一人暮らしをしている人は3名と少ない。本研究の対象者は、全てが同居はしていないものの、3世代にわたる家族をもっている人たちがほとんどである。

### ⑦経済状態：

経済状態については回答を控えた人が4名いた。5段階で尋ねた本対象者の経済状態の平均は2.8で、それほど良いとはいえない、年金で生活している人たちも多く見られ、シルバー・センターでの収入はそれほど高くはないものの、足しにはなっているようである。シルバー・センターでの仕事の他に、陶器製造にかかわる軽作業をアルバイト的にやっている人も何人かみられた。男女差を見ると、男子が平均2.9、女子が平均2.4と、男子のほうがややよいという結果になっている。

## 2) ジェンダー特性およびジェンダー観について

### ①BSRIからみたジェンダー特性の保有度について：

BSRIの得点から分類された4タイプの内訳が表2に示されている。「両性性具有者」は、男子対象者では20名中11名(55%)、女子対象者では10名中5名(50%)となっている。「男性特性保有者」、「女性特性保有者」については、男子対象者では、それぞれ3名(15%)と2名(10%)、女子の対象者では2名(20%)ずつとなっている。「両貧性」の数は、男子対象者で4名(20%)、女子対象者で1名(10%)となっている。男女いずれの対象者においても半数余りが「両性性具有者」に該当している。本結果を、先行研究の下仲ら(1990, 1991)の結果と比べてみる。比較しやすくするために、下仲らの2つの研究と本研究における4タイプの出現人数を同じく表2に示してある。63歳から93歳までの男子約250名(平均年齢72.5歳, SD=6.06)、女子約290名(平均年齢71.7歳, SD=6.49)を対象にした研究(下仲ら, 1990)、あるいは60代から100歳老人までを対象とした研究(下仲ら, 1991)では、いずれの研究でも「両性性具有者」の数は、男女対象者どちらにおいても25~40%弱程度となっている。それに比して、本研究での割合はかなり高い。さらに「男性特性保有者」、「女性特性保有者」については、男子対象者では「男性特性保有者」が、下仲らの前者の研究(1990)では27%、後者の研究(1991)では17%余りとなっている。一方、「女性特性保有者」については、前者(1990)では10%、後者(1991)では17%足らずとなっている。さらに女子対象者では、「男性特性保有者」が、前者の研究(1990)では10%、後者の研究(1991)では6%足らずとかなり少ない。「女性特性保有者」については、前者の研究(1990)では26%、後者の研究(1991)では40%近くとなっている。なお、「両貧性」については、前者(1990)、後者(1991)いずれにおいても、また男女対象者いずれでも27%~35%の範囲で出現しており、全体の1/3程度を占めている。

下仲らによるこの二つの結果には類似している部分とそうでない部分が見られる。即ち、「両性性具有者」と「両貧性」が男女対象者ともそれぞれ全体の1/3程度を占めている点は類似しているが、「男性特性保有者」と「女性特性保有者」の割合が男子対象者と女子対象者で逆転している点は異なっている。これらの結果を本研究の結果と比べてみると、本結果では、男女対象者とも「両性性具有者」がほぼ半数とかなり高く、残り半数を「男性特性保有者」と「女性特性保有者」および「両貧性」が1/3ずつ分けあっている。また、男子対象者に「両貧性」がやや多く、女子対象者に少ないことが特記できる。

表2 BSRIにおける4タイプの内訳 —類似研究との比較—

研究者(年)	対象者	人数	平均年齢	(SD)	mf(%)	m(%)	f(%)	u(%)
下仲ら(1990)	男子	247	72.5	6.06	34	27	10	27
	女子	288	71.7	6.49	27	10	26	35
下仲ら(1991)	男子	295			37.3	17.5	16.5	28.5
	女子	392			25	5.8	38.6	30.1
湯川(2003)	男子	20	74.1	8.21	55	15	10	20
	女子	10	67.8	3.77	50	20	20	10

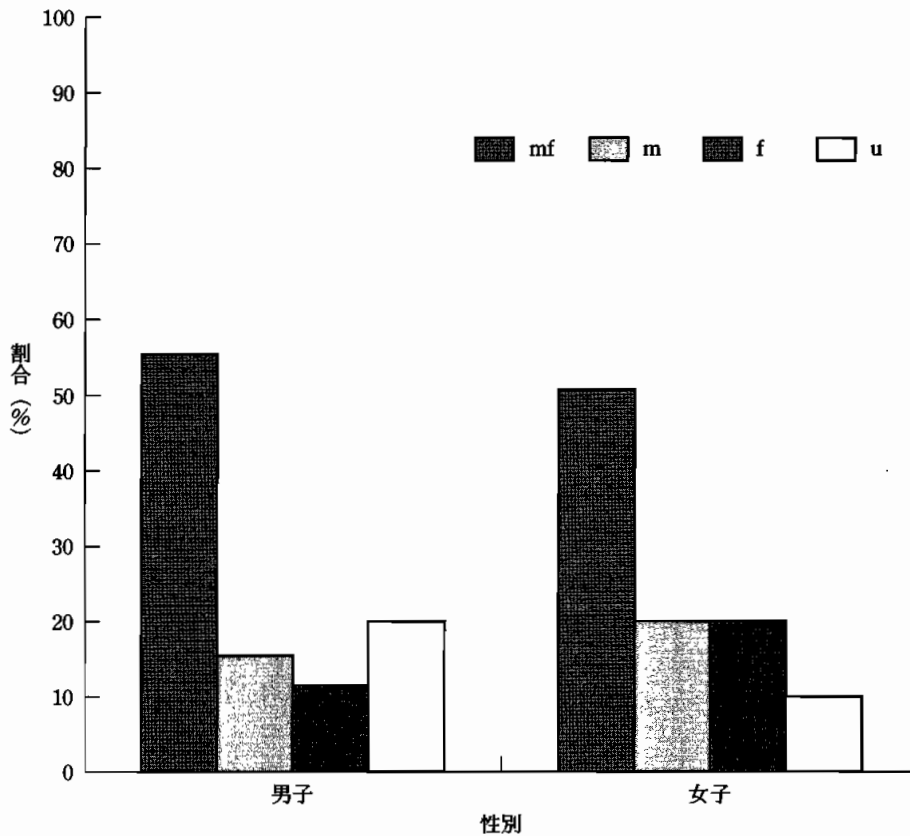


Fig. 1 4タイプの出現頻度

## ②「自由回想」からみたジェンダー意識について：

調査対象者が、自分のこれまでの生活や人生を「男として」あるいは「女として」回想した内容を、「男(女) | でよかったかどうか、「男(女) | として得したこと、損したことは何か、今度生まれるなら「男」と「女」のどちらがいいか、の3点から整理した。その結果を表3に示した。

表3から読みとれるように、男子対象者では自分の性を肯定している人が大多数で、必ずしも肯定できていない人は、回答のない(NA)1名と「半々」としている2名のみであった。一方、女子には必ずしも肯定できていない人が6名みられる。これまでの人生において、自分の性を否定しないまでも肯定的には捉えられていない人が女子に多く存在するという事実は注目すべき点である。「今度生まれ変わるとしたら」という問いには、男子で2名が「半々」と答えている他はすべて「男がいい」としている。女子では「男」と答えている人が1名、「半々」が1名、「中性」が1名いる。他には明確に答えていない人1名と、「生まれるなら、美人の女に」という屈折した回答を行っている人が1名いる。さらに回答の内容をみると、男子では、これまでの「男としての人生」を、「思ったことができる」、「自由にやれる」、「いろいろやれる」など積極的に肯定している人が多い。積極的に肯定しないまでも、「損したことはない」「このままでいい」と思っている人も多い。しかし、女子においては、女性であることを積極的に肯定している人は10名のうちの4名しかいない。その他の人は、「今度も女」と答えている人でも、これまでの「女としての人生」を積極的に肯定できていないわけではない。「男が得」、「昔は苦勞した」、「離婚時には男がよかった」などの回想はそれを物語っている。

ついで、BSRIで測定したジェンダー特性のタイプと、自分の性をどう捉えているかというジェンダー観との関連についてみる。男子で「今度生まれ変わるとしたら半々」と答えている2名はどちらもmf型には属していない。一方、女子では、「男に生まれたい」とした人がmf型に1名いる。mf型に分類された他の4名のうち1名は「女でよい」と答えているが、あとの3名は、「中性に」と答えた1名と、生まれ変わりについて明確な回答をしていない1名、さらに「まあ女」と答えつつも、「日本の男はだめ」という失望感をもっている1名である。ちなみに、過去も生まれ変わりも「女」であることを肯定している女子について、彼女たちのジェンダー特性の型をみると、2名はf型、1名はu型である。「半々」と答えた1名と「今度は美人の女に」と答えた1名はm型に属している。

以上にみたように、ジェンダー特性と「自己の性に対する回想と生まれ変わり希望」(ジェンダー意識)との関係については、反対の性への生まれ変わりの希望をもつ者は、男子ではmf型以外にみられ、女子ではむしろmf型にみられるという逆の結果となっている。

## 3) ジェンダー特性とサクセスフル・エイジングの関連

「両性性具有者」に分類された対象者のエイジングの姿が良好であるかどうかを、以下の3点、即ち、健康度、生活満足度、自尊感情との関係からみる。性別とジェンダーの型別に、各対象者の得点を示したものを表4に掲げた。

### ①「健康度」について：

本対象者は、「シルバー派遣センター」に登録し、週に何回か、草取り、清掃、庭木の剪定、

表3 男(女)としての人生についての回想

番号	年齢	性別	型	男(女)としての人生についての回想
1	67	女	mf	女でよい：嫁や家を手伝える、昔は苦勞したが、体が丈夫で、仕事もできた
2	69	女	mf	キャリア・ウーマンは男と同じ、家事は評価されない、男とか女とかに関心ない
3	73	女	mf	まあ女：離婚時には男がよかった、日本の男はダメ
4	64	女	mf	女でよかったが、今度中性に(男女どの仕事もできる)、女として損した、賃金低い
5	66	女	mf	男：女は損、女はウジウジしてイヤ、仕事バリバリしたい、今度は男、男も女もやりたい
6	74	女	f	女でよかった：男は働かなくてはいけない、昔はよかった、能力があれば平等を言える
7	68	女	f	女：損したと思わない、今度も女、女としてのことはやってきた
8	64	女	m	半々：女だから出産できた、女だからと言われる
9	70	女	m	女は美人でないとダメ、女でいいことない、男が得、今度は美人の女に
10	63	女	u	女：苦勞してもやはりよい
1	87	男	mf	まあ男でよい：毎日の生活に満足、男でなくてはと考えたことない
2	70	男	mf	男：家事しなくてよい、今度も男でいいかはプラスとマイナスがある
3	80	男	mf	男でまあいい：損してない、今でよい
4	64	男	mf	男：酒を飲める、酒場にいける、女はできない
5	61	男	mf	男：損したことなし
6	64	男	mf	どちらかと言えば男：損しない、自由が利く、男とか女とか余り関係ない
7	78	男	mf	男：やりたいことできる、男と女は性分が違う
8	80	男	mf	男：テキパキした性格なので損なし、徴兵制も人間形成に
9	84	男	mf	男：幸せ、今度も男、女は心配、立派な男をみつければ幸せ
10	81	男	mf	男：長男で自由に言い分通せた
11	69	男	mf	男：日本は男性社会、気ままできる、今度も男、女は出しゃばってはダメ
12	76	男	m	男：思ったことできる、損なし、今度も男
13	78	男	m	半々：女の方がいろいろやれる、女は人との関係難しい、男は思いきってできる
14	66	男	m	絶対男：今の日本文化の仕組みは男によい、女の仕事は限られる
15	79	男	f	男：損得なし、今まで通りのことをしたい
16	66	男	f	男：損なし、時々女の気持ちがわからない
17	72	男	u	男：やりたいことできる、損なし、今度も男に
18	62	男	u	NA、育ちのなかで男女差別意識はなかった
19	83	男	u	半々：優柔不断なので、強い男になりたい
20	82	男	u	まあ男：今度も男に

表4 性別と型からみた調査対象者の「健康度」・「生活満足度」・「自尊感情」

( ) 得点

	No.	年齢	性別	健康度		生活満足度	自尊感情	BSRI		
					計			M値	F値	型(type)
	1	67	女	3 1 3	7	19	24	4.65	5.1	mf
	2	69	女	5 2 3	10	19	39	5.4	5.05	mf
	3	73	女	5 1 3	9	15	35	4.9	4.8	mf
	4	64	女	3 2 3	8	17	32	5.15	5.45	mf
	5	66	女	5 2 3	10	20	22.5	5.95	5.7	mf
(mean)					8.8	18	30.5			
(SD)					1.3	2	7.09			
	6	74	女	3 2 3	8	18	30.5	3.8	5.65	f
	7	68	女	2 1 2	5	18	34	3.9	5.7	f
	8	64	女	4 1 3	8	13.5	36	6.45	3.9	m
	9	70	女	3 1 2	6	15.5	25.5	4.5	4	m
	10	63	女	3 1 3	7	16	22	2.95	4.65	u
(mean)					6.8	16.2	29.6			
(SD)					1.3	1.89	5.82			
(mean)		67.8			7.8	17.1	30.1	4.77	5	
(SD)		3.77			1.62	2.06	6.13	1.05	0.67	
	1	87	男	2 1 2	5	17	33	5.2	5.45	mf
	2	70	男	3 1 3	7	12.5	34	4.45	4.9	mf
	3	80	男	4 1 3	8	14	32	6.1	5.95	mf
	4	64	男	3 1 5 2	5.5	12	25	4.75	4.85	mf
	5	61	男	3 1 2	6	16	34	4.35	5.1	mf
	6	64	男	4 2 2	8	18	30	4.4	5	mf
	7	78	男	5 1 3	9	20	40	4.9	6.275	mf
	8	80	男	5 2 3	10	19	32	5.2	6	mf
	9	84	男	5 2 3	10	19	32	6.35	6.2	mf
	10	81	男	5 2 3	10	12	34	5.2	5.8	mf
	11	69	男	5 2 3	10	18	35	6	5.4	mf
(mean)					8.05	16.1	32.82			
(SD)					1.93	3.02	3.63			
	12	76	男	4 2 3	9	18	29	5.95	4.8	m
	13	78	男	4 1 2	7	15	36	4.6	4.4	m
	14	66	男	3 1 2	6	17	40	4.7	4.2	m
	15	79	男	3 1 2	6	20	27	2.85	4.85	f
	16	66	男	2 1 1	4	18	27	3.45	5.15	f
	17	82	男	2 1 2	5	15	24.5	4.1	4.8	u
	18	72	男	3 1 2	6	13	27	3.65	3.8	u
	19	62	男	5 2 3	10	20	39	4.1	4.55	u
	20	83	男	3 1 3	7	14	17	3.25	4.6	u
(mean)					6.67	16.67	29.61			
(SD)					1.87	2.55	7.44			
(mean)		74.1			7.43	16.38	31.38	4.63	5.1	
(SD)		8.21			1.98	2.76	5.74	0.9	0.68	
(mean)		72			7.55	16.62	30.9	4.67	5.07	
(SD)		7.6			1.85	2.53	5.8	0.94	0.66	

(注) : Mean, (SD) は、男女別と全体について算出されている。

公園やマンションの管理人、建具の修理、市役所や駅の駐輪場での自転車整理など、軽・中程度の作業や労働に従事している人たちである。従って、病院通いをしている者は全体の約2/3とかなり多いが、重大な健康上のトラブルをもっているケースは少ないとみられる。表4に見られるように、健康度をみる本指標では、得点は3点から10点までの範囲で測られるが、最高の10点の人が7名おり、最も低い場合でも4点が1人いる程度である。理論的平均は6.5点となるが、本対象者の平均は男子で7.4点、女子で7.8点、全体で7.5点強とやや高くなっている。身体的な健康さは、サクセスフル・エイジングの基本的要件の一つとされているが、本対象者は健康状態の点では、特に問題があるとはみなせない人たちといえるだろう。このような傾向の中で、「両性性具有者」に分類された人たちが、それ以外に分類された人たち（男性的特性を多くもっているm型、女性的特性を多くもっているf型、両方とも保有していない両貧性とされるu型）よりも健康度が高いかを見るための手だてとして、グループの人数はかなり少ないが、性別（sex）とジェンダー特性保有の型（type）を要因とした分散分析を試みたところ、型（type）の有意な主効果が見られた（ $F(1, 26) = 6.255, p < 0.5$ ）。つまり、「両性性具有者」のほうが健康度において高いという結果である。このことは、即ち、「男性的特性」と「女性的特性」を合わせもつ人たちのほうが、より健康であるということの意味している。

## ②「生活満足度」について：

「あなたは毎日の仕事に満足していますか」、「生きることはおもしろく毎日が新鮮ですか」、「生きることは価値があると思いますか」、など5項目から、対象者の生活や人生に対する満足度を尋ねた結果、同じく表4に示したようになった。満足度は5点から20点の範囲で測られるが、本対象者のほとんどが理論的平均値である12.5点より高く、平均点以下のケースは3名のみで、それも12点と僅かに低いのみであった。なお、満足度については、女子の対象者のほうが17.1点と、男子対象者の16.4点よりも若干高い傾向にあった。本対象者たちのこのような特徴を念頭において、「両性性具有者」に分類された人たちが、それ以外に分類された人たちよりも生活や人生への満足度が高いかを見るために、先の「健康度」と同様に、分散分析による検定を試みたが、「両性性具有者」のほうが、それ以外に分類された人たちよりも僅かに平均が高い程度で、有意な検定結果は示されなかった。生活満足度については、「両性性具有者」が特に高いわけではないという結果であった。ちなみに、女子対象者では、「両性性具有者」グループのほうが、それ以外の人たちより平均点が若干高くなっているのに対して、男子の対象者ではむしろ「両性性具有者」の平均が、それ以外のグループの平均よりも僅かだが、低いことが特記できる。本研究では、両性性具有者であることと、「生活満足度」からみたサクセスフル・エイジングとの間には直接的な連関はないといえるだろう。

## ③「自尊感情」について：

調査対象者が自分をどうみているか、自分を高く評価できているか、という自尊感情を尋ねた。自尊感情得点の範囲は10点～40点で、理論的平均値は25点である。結果は以下のようであった。まず、本研究の対象者全体の平均はほぼ31点で、理論的平均値より高くなっている。男女子対

象者とも高いが（男子の平均：31.4点、女子の平均：30.1点）、男子のほうが僅かだが高い。次いで、「両性性具有者」のほうが、それ以外に分類された人たち（m型、f型、u型）よりも自尊感情が高いかについて分散分析を試みた。その結果、有意な差は得られなかったものの、「両性性具有者」のほうが、それ以外に分類された人たちよりも僅かではあるが、平均が高くなっている。この傾向は男女いずれの対象者でも指摘できた。

以上、「男性的特性」と「女性的特性」をあわせもつ人、即ち「両性性具有者」である人は、そうでない人よりもうまく年を重ねている、つまり、サクセスフル・エイジングを果たしつつあるという予想を、①「健康度」、②「生活満足度」、③「自尊感情」の3点から検討した。結果は顕著ではないものの、予想を否定する方向にはなかった。つまり、「両性性具有者」である人は、そうでない人よりも自分の生活や自己に対する評価が高いという傾向を窺うことはある程度可能であった。なお、健康であることがサクセスフル・エイジングに関与しているという点については支持された。

ちなみに、本研究は対象となった老年期の人たちの人数が極めて少なく、統計処理に付すにふさわしいデータではない。本研究の目的は、多数の対象者による数量的検討を第一に目指したのではなく、むしろ、老年期にいる人、一人一人の考えや意識を直接に聞くことにあった。つまり、老人自身の生の声（voice）を聞くことによって、サクセスフル・エイジングを果たしつつあるとみられる人々を発見すること、そして、その人たちのもつジェンダーに対する考え方や現実の生き様を映し出すことを通して、サクセスフル・エイジングのありようとそのプロセスを確かめることが狙いであった。この意味では、本研究はある程度の成果を上げ得たのではないかと考える。つまり、本調査への協力を得た対象者の中に、本研究の予想を裏付けるケースをいくつか発見できたのである。次に、本対象者の中から、その人のもつジェンダー特性およびジェンダー意識とエイジングのありようが密接に関連しているとみられる事例をいくつか紹介する。

#### 4) 事例紹介

以下に、既存のジェンダー規範やステレオタイプに固執しておらず、サクセスフル・エイジングを果たしつつあると見られるケースと、従来のジェンダー意識を強くもって、エイジングがうまく進んでいないと見られるケース男女1名ずつを選び、かれらの姿を素描する。なお、紹介するケースについては、仮名を用い、重大なプライバシーにかかわる事柄は、筆者の判断で多少の修正を加えたことを断っておきたい。

##### ①事例 A (M. K) :

M. Kは、ジェンダー特性の分類で「両性性」のmf型に分けられた女性である。現在、一人暮らしをしている。昭和8年の生まれで、年齢は、調査時点の2002年11月末で69歳である。中学を卒業後、しばらく実家の農業を手伝いながら、稽古事をしたりして、就職への意欲はほとんどなかった。結婚の意志はあったが、結婚条件（丈夫で清潔な人）について妥協せず、結果として現在まで独身をとっている。現在結婚への関心は薄らいでいる。23歳で、東京に出て、病院の給



食係として勤務しながら、調理師の免許を取得した。15年ほど病院に勤務し、その後、銀行の独身寮の賄い係として65歳で定年を迎えるまで勤続した。その間、当銀行の東京近郊の数カ所の独身寮に転・配属された。定年後は、S市に戻り、「シルバー派遣センター」に登録して、週1～2回、裁判所の清掃の作業に従事している。健康状態はこれまで極めて良好で、活動するのが好きである。現在も働くためではなくても、外へ出るのが好きで、全然億劫ではない。健康には自信があり、現在、臓器提供のドナー登録を希望しているほどである。家族構成は、両親と弟の4人家族だったが、両親の面倒は弟が引き受け、本人に介護の経験はない。老いた姿やそれを介護することに対する嫌悪感がややあり、自分が病気になったら、薬をもらってポックリ死にたいと思っている。長年の就労によって、経済状態は極めて良好で、非常にゆとりがあると答えている。

M. Kの生育歴と現在の生活状況は以上のような背景を念頭において、彼女が身につけてきたとみられるジェンダー特性と意識をみる。これまでの経歴の中で彼女自身は「男性的特性」と「女性的特性」を、働く女性に必要なものとして身につけてきたと思われる。そして、彼女の「生活満足度」と「自尊感情」は、前者が19点、後者が39点と、いずれの尺度においても満点に近い値を示している。事実、彼女は、質問に対する評定をしながら、『今で十分。充実している』『今のままでよい』と補足説明を加えているほどである。

以上に見られるように、「男性的特性」と「女性的特性」をほぼ同じ高さで備えた「両性性」保有者であるM. Kは、今の生活や境遇に十分満足しており、サクセスフル・エイジングを得ているといってよいだろう。ジェンダーにとらわれない生き方が、サクセスフル・エイジングをうんでいる好例であろう。

彼女は、これまでの人生を生きる中で、旧来のジェンダー規範や価値観に固執せず、人生の流れに沿って「男性的特性」、「女性的特性」にかかわりなく、それらを必要なものとして、ことさら意識することなく身につけてきたのだと考えられる。しかし、彼女は、ウーマン・リブの見地から最も「両性性」を保有している理想の女性モデルとされる、いわゆる「キャリア・ウーマン」的な華やかさは持ち合わせていない。職場や寮で、働く人たちの食を賄うという、いわば、目立たない裏方の役割を担ってきた彼女の就労経験がそうさせていると推察される。自由回想での語りはそれを物語っている。これまでの人生を振り返って、彼女は「女でよかった」と述べているが、その理由は、『男だったら、もっとがんばらなくてはいけない。女だから極楽トンボでもよかった。これまで仕事をやりたいと特に思ったことはないが、流れに沿ってやってきただけ。与えられた仕事は一生懸命やってきた。』『キャリア・ウーマンは男と同じで、外に出ただけだと思う。』『家事は評価されない。』『今、男とか女とかに関心はない。』『女が出しゃばると、女のせいで男は弱くなる。』等の発言は、現実には、本人自身は確かに男女両方の特性を身につけてはいても、意識の上では、まだ従来のジェンダー規範を肯定している部分があることを物語っており、彼女の他者に対する厳しい眼が特に同性に向けられているのが注目される。

## ②事例B (O. K) :

事例O. Kは、ジェンダー型の分類で「両性性」のmf型に分けられた男性である。大正13年の生まれで、調査時点の2002年11月末で78歳である。配偶者とは6年前に死別しており、その後、

3人いる子どもの内の次男夫婦と孫2人と同居し、現在に至っている。中学を卒業後、ずっと陶器の絵付けの仕事をしてきた。現在、シルバー・センターの紹介で、駐輪場の自転車の整理を主に行っている。また、地区の「お宮さん」の檀家の総代も務めている。配偶者との結婚生活は「普通の人より良かった」と回想しており、経済的にも非常にゆとりがあると答えている。配偶者との死別以外、比較的平穏な人生を送ってきたと推察される。健康に特に留意していて、1日午前と午後2時間程歩き、食欲もある。健康状態を尋ねる質問では10点をとっている。サクセスフル・エイジングの基本的要件とされる「健康さ」と「経済的余裕」を満たしているケースである。「生活満足度」と「自尊感情」については、前者では20点、後者では40点とどちらも最高点をとっている。O、Kはサクセスフル・エイジングを示すいずれの指標でも、最高点をとっており、うまく年を重ねているケースと見なすことができる。このことは、質問の回答時に、「丈夫でいること。友人と会話すると気分も違う』『皆に尽くしてきた。今の自分を尊敬できている』等の自発的な補足説明でも裏打ちされている。

ジェンダー特性のタイプでmf型に属する彼のジェンダーに対する価値観や意識を「自由回想」から拾ってみると、「男でよかった。女性に比べてやりたいことができてよかった。やっぱり男がいい」と語っており、男性としての意識が強いといえる。彼の「両性性」の保有の程度を見ると、「男性的特性」度より「女性的特性」度のほうが高く、性格的には、「女性的な要素」が強いことが読みとれる。O、Kは、過去の人生において伝統的なジェンダー規範を変化させるような顕著な経験をもっていない。「絵付け」という、いわばとりわけ男性的な能力を必要としない、男女の能力差が顕著ではない職業をこつこつと地道に歩んできたというこれまでの人生が「両性性」につながったと推察されるケースといえるだろう。

### ③事例C (H. S) :

事例H、Sは、ジェンダー型の分類で「男性的特性」のm型に属する女性である。昭和7年の生まれで、調査時点の2002年11月末で70歳である。配偶者と現在二人で暮らしている。尋常小学校6年、高等小学校2年を出て、まず農業の手伝いをした。ついで、20歳のときに、陶器関係の仕事に半分内職の形でパートに出、15年くらい働いた。その後、40歳過ぎに電気のスイッチ製造の会社に9年勤めたが、体をこわして家事に専念することとなった。「シルバー・センター」に登録して10年くらいになるが、依頼された家庭の「建具の修理」を主にやっている。配偶者は現在70歳で、これまでずっと陶器関係の仕事をしてきたが、今は辞めている。最近ボケが出始めているが、賭け事が好きで、仕事もしないではまりこんでいる。生活費は配偶者と2人の年金で賄っているが、配偶者はお金があれば、賭け事に出かけるという日々を送っている。経済状態についての質問には、明確に答えてはいないが、楽ではないと推察される。子どもは娘が2人いて、孫も5人おり、近くに住んでいる。義父はとうに戦死した。義母は今93歳だが、6年前に寝たきりになり、現在も「特別養護老人ホーム」で療養中である。義母は結構元気で、食欲もある。義母の介護はH、Sが毎日病院へ通う形で、全て引き受けているが、親戚からは、病院に入れていることを暗に非難されている。H、Sの健康状態は、本人は「普通」と答えているが、医者通いをしており、健康度得点は6点で、本対象者全体の、あるいは男女別の平均点の7.5点に比べて、

決して良いとはいえない。かつて、体をこわしたことが影響しているようである。「生活満足度」と「自尊感情」については、前者では15.5点、後者では25.5点とどちらも高とはいえない。特に「自尊感情」については、全平均、男女別の平均ともに30点前後と本対象者の得点がかかなり高いのに比して、彼女の低さはやや目立つ。

以上のような点から見て、H. Sのエイジングの姿はあまり良好とは思われない。その原因は、彼女を取り巻く環境、とりわけ配偶者との関係にあることが、「自由回想」での彼女の語りに顕著に読みとれる。彼女によれば、配偶者は『悪い人ではないが、世間知らずで、気がつかず、自分中心で、これまで、経済的なことも、家庭のことも全て自分が背負ってきた』という。『結婚生活は幸せではなかった』『女でいいことはなかった』『男は得だと思った』『いい夫に巡りあいたい』『今度は幸せに生まれたい』『今度生まれ変わるとしたら、美人の女がいい。女は美人でないと』といった、配偶者への不満や自己の境遇に対する不満が細かに語られている。

H. Sは、ジェンダー特性ではm型に属する。このことは、配偶者はいるものの、これまで実質的に家庭を支えていたのは彼女であり、仕事と家事の両立を懸命に果たしたきた結果、身につけてきたものと推察される。しかし、それは彼女が望んでいたことではなく、不本意であったことは明白である。彼女は、伝統的なジェンダー規範やステレオタイプを強く肯定しており、そのような人生を望みながら、果たせず、今日に至っている。これらが、サクセスフル・エイジングを阻害している一因となっていることは否定できないであろう。「健康状態」および「経済状態」もマイナス要因として、これらの要因に密接に関連していると考えられる。現実には、男性的な特性を身につけながら、意識の上では、伝統的なジェンダー・ステレオタイプに固執している。既存のジェンダー規範に沿った発達理論がもつ不都合さ、問題点をこのケースに具体的にみることができる。

#### ④事例D (R, O) :

事例R, Oは、ジェンダー型の分類で「両貧性」のU型に分けられた男性である。大正8年の生まれで、調査時点の2002年11月末で83歳である。配偶者は健在で、現在二人で暮らしている。尋常小学校6年、高等小学校2年と青年学校の夜間に1年通っており、教育年数は通算で10年である。職歴としては、学校を出て、まず、家業である農業に従事していたが、昭和11年から終戦の昭和20年まで応召で軍隊にいた。終戦後、しばらく農業をやっていたが、昭和25年から44年まで自衛隊に入った。その後、印刷関係の民間会社に就職し、昭和54年に退職するまで勤めた。それからは、病院に配偶者と一緒に勤め、平成4年までいた。「シルバー・センター」へは平成4年からで、主に「草取り」をしている。配偶者とは終戦直後の昭和20年に結婚し、子供は3人、孫も5人いるが、いずれも別居している。「経済的余裕」については、「普通」と答えている。健康状態については、本人は「普通よりよい」と認知しているが、医者にかかっている、得点も7点と全体の平均よりやや低い。「生活満足度」と「自尊感情」については、前者では14点、後者では17点とどちらも高くない。特に「自尊感情」の低さが目立つ。このことは、「生活満足度」への回答時に、「生きることは価値がありますか」という質問に、『生きる価値は、私のようにないと思う』と補足して答えたり、「自尊感情」について、「私は、普通の人と同じくらいには物事

ができると思いますか」、「自分はいろいろなことをうまくやれると思いますか」などの質問に、「すべてにあまり思わない」と答え、「あなたは、もう少し自分を尊敬できたらと思いますか」には、「それ以上にならなくてよい」と答えていることなどによく現れている。

ジェンダー特性のタイプでU型に属する彼の価値観や意識を「自由回想」からみると、『男でよかったかどうかは、半々。自分は優柔不断なので、強い男になりたい。』と、『男になること』を望んでいる。

R. Oは、本調査対象者の中では、高齢の部類に入るが、種々の測度からみて、適応的加齢を果たしているとはいいがたい。これまでの人生の中に、特にサクセスフル・エイジングを阻害するような要因は見出せないが、「両貧性」という型が示しているように、性格的なものが作用していることが推察される。本調査の実施においても、耳がやや遠いことも影響していると思われるが、かなりの時間を費やして、回答時の様子から、全般的な印象としては、活気がないという感じを受けるタイプである。

### まとめと考察

老年期にいる人々がサクセスフル・エイジングを果たしていく上で、ジェンダーの発達がどのような影響や関わりをもっているかを検討すること、即ち、従来のジェンダー規範やステレオタイプに則って形成されたジェンダー特性やジェンダー意識は、サクセスフル・エイジングを得るのに果たして有効に働きうるのだろうか、という疑問を実証的に検討することが本研究の目的であった。具体的には、現在までの人生で身につけてきたジェンダー特性や意識が、従来のジェンダー規範やステレオタイプに沿ったものである人の場合には、現在の生活や自己のありように必ずしも満足していないのではないかと、言い換えると、伝統的なジェンダー規範に固執せず、柔軟な意識や特性を身につけてきた人は、現在の生活に満足しており、自己の評価も高いのではないかと、という予想を確かめることであった。このような目的に従って、本研究では、61歳から87歳の老年期にある人々30名に、面接形式による聞き取り調査を行った。現在までに身につけてきたとみられるジェンダー特性や意識をみるために、Bem, S.L. (1974, 1975) によって開発されたBSRIの日本版を用いた。これに、これまでの人生を、「男(女)としてどうであったか」という点から振り返る自由回想からジェンダー意識をみる聞き取り調査がなされた。現在のエイジングのありようをみるためには、「健康度」、「生活満足度」、「自尊感情」の3つの尺度に加えて、「経済状態」および「家族の状況」が調査された。

その結果、調査協力者全体の約半数が「両性性具有者」であるmf型に分類された。男子あるいは女子いずれの対象者においてもほぼ半数がmf型に属しているという結果であった。次いで、過去の人生をジェンダーの次元から自由に回想してもらった結果は、男子の対象者では、自己の性に対する肯定的評価が大勢を占めていた。女子の対象者では、自己の性を肯定する者と、そうでない者にほぼ二分された。女子の中に、今度生まれ変わりたい性として、現在と反対の性を望む者、どちらの性を選ぶかは半々という者、中性を選ぶ者がみられたことは注目すべき点であった。

本対象者におけるジェンダー特性と、現在の生活や自己の健康についての満足度、自分をどのように評価しているかという自尊感情の程度との関係を分析したところ、健康度については、mf型に属する人たちは、それ以外の人たち（男性的特性を多くもっているm型、女性的特性を多くもっているf型、両方とも保有していない両貧性とされるu型）よりも、健康度が高かった。しかし、「生活満足度」および「自尊感情」についてはmf型のほうが得点は僅かには高いものの、差があるとはいえなかった。このことは、「男性特性」「女性特性」を兼ね備えている人が、サクセスフル・エイジングを得ているという予想を明確に支持するものではないことを意味している。

このような結果を念頭に、本研究の最終的な目的であるケース・スタディを行ったところ、mf型に属する人たちのなかに、本研究で立てられた予想に合致している人を少数ではあるが発見できた。即ち、「両性性」を身につけているとみられる人で、現在の生活に対する満足感や自己評価が高く、現在の自分に満足している人たちが確かに存在していたのである。だが、伝統的なジェンダー規範に従って、自己の性に焦点化したジェンダー特性を保有している人が、サクセスフル・エイジングに失敗しているという顕著な事例は発見できなかった。むしろ、どちらの性の特性ももっていない「両貧性」の人たちが、概して、現在の自分や生活に満足感をもっていないという傾向が窺われた。

以上が、本研究から得られた結果の概要である。提示された結果の内興味深い点が二つ見られた。一つは、男女とも本対象者にmf型が多かったことである。今ひとつは、女子では、自己の性を変えたいと思っている女子はmf型にみられるが、男子では、むしろmf型以外にみられるという点である。まず、第一の点についてであるが、特に女子の結果については、本調査の対象者が居住している地域の特質からの説明が一つ可能であろう。即ち、当地区は、中小企業が大多数ではあるが、陶器の生産地として有名な地域であり、住民の多くは、家族ぐるみで陶器関係の仕事に就いているケースが多かった。つまり、家族皆が働いて一定の生活水準を維持できるという土地柄である。そのような地域では、夫婦共働きは普通のことであろう。女性が働く中で、ごく自然にmf型を身につけるような条件が備わっていると考えられる。実際、本対象者の女子で、現在に至るまで無収入の専業主婦というケースは一人もいなかった。女子の対象者にmf型が多い理由の一つはここにあると思われる。一方、男子の対象者にmf型が多いことは、上記の理由のみでは説明がつきにくい。本研究の男子対象者に比較的高齢者が多かったことから、男子にmf型が多い理由として、本研究で期待しているような、サクセスフル・エイジングとの何らかの関連を推察してもよいかもしれない。今後の検討が要請される。

次いで、二つめの結果については、これまでのジェンダーに関するさまざまな研究結果で提示されている知見から説明できると思われる。すなわち、伝統的なジェンダー規範にもとづいて形作られている「男性的特性」あるいは「女性的特性」を自己の性別に沿って身につけることについて、男子はほぼ肯定的で、受容的であるが、女子においては一概に肯定されず、否定的にとらえられる傾向が強いという知見からである。ジェンダー規範やステレオタイプが、男子（男性社会）を中心にできあがっていて、女子には不利であることを明白にしたのが、ウーマン・リブ、さらにはフェミニズムであり、これを男女差別として、その撤廃を要求していることは、既によ

く知られていることである。女子は、自身の性に期待されている特性や役割よりも、むしろ男性に期待されている役割や特性を望んでいて、それが高学歴や社会進出、就労化という行動につながっているのも周知のことである。本研究の女子対象者は、そのほとんどが就労経験をもち、現在も「シルバー・センター」で仕事をしている人たちである。本調査の「自由回想」で出されていて、女子にだけ見られた『女は損』という声は、自己の性に対するマイナス評価を意味したものであり、男子には見られない反応であったことも、このことを裏付けるものであろう。

最後に、本研究結果は、多くの老人を対象とした大規模な調査研究から導かれたものではない。しかし、少人数であっても、かれらの生の現実の姿、つまり、筆者の質問に対して発する回答や言葉、さらには質問から連想し、意識化された自己への回想を通して得られたのが本資料である。その意味で、本研究によって得られた成果は貴重なものといえるだろう。

付記1：長時間にわたる、しかもプライバシーにかかわるような質問が多く含まれていた調査に快く協力いただいた本調査協力者の方々に厚く謝意を表し、ここに謝辞を述べるものである。

付記2：本研究は平成12～14年度科学研究費補助金（基盤研究C）（課題番号：12610152）の助成を受けてなされた研究報告の一部である。

## 文 献

- Baltes, P.B., Lindenberger, U. & Staudinger, U.M., 1998 Life-span theory in developmental psychology, In; Lerner, R.M. eds. Handbook of child psychology, 5th ed. Vol.1, New York, pp.1029-1143.
- Bem S. L., 1974 The measurement of psychological androgyny. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 42, 155-162.
- Bem S. L., 1975 Sex-role adaptability: one consequence of psychological androgyny. *Journal of Personality and Social Psychology*, 31, 634-643.
- 星野 命 1970 感情の心理と教育 (二), *児童心理* 24, 1445-1477.
- 柏木恵子・高橋恵子 1995 発達心理学とフェミニズム, ミネルバ書房
- Katsurada, E., & Sugihara, Y. 1999 A preliminary validation of the Bem Sex Role Inventory in Japanese culture, *Journal of Cross-cultural Psychology*, 20, 48-59.
- Maddox, G.L., 1987 *The encyclopedia of Aging*, Springer Publishing Company, New York, 569-570. (エイジング大事典刊行委員会 (監訳) エイジング大事典 早稲田大学出版部)
- 柴田玲子 2001 中年期女性にとっての閉経と更年期 *日本更年期医学会雑誌*, 9 (2), 247-255.
- 下仲順子・中里克治・河合千恵子 1990 老年期における性役割と心理的適応, *社会老年学*, 31, 3-11.
- 下仲順子・中里克治・本間 昭 1991 長寿にかかわる人格特徴とその適応との関係— 東京在住100歳老人を中心として—, *発達心理学研究*, 31, 136-147.
- Sinnot, J.D., 1977 Sex role inconstancy, biology, and successful aging: A dialectical model, *Gerontologist*, 17, 459-463.
- Sinnot, J.D., 1982 Correlates of sex roles of older adults, *Journal of Gerontology*, 37, 587-594.
- Sugihara, Y. & Katsurada, E., 1999 Masculinity and femininity in Japanese culture: A pilot Study, *Sex Roles*, 40, 653-646.

Sugihara, Y. & Katsurada, E., 2003 Gender-role personality traits in Japanese culture, *Psychology of Women Quarterly*, 24, 309-3168.

高橋恵子・波多野宜余夫 1990 生涯発達の心理学. 岩波書店

湯川隆子 1979 性差 日本児童研究所(編) 児童心理学の進歩 vol.18, 金子書房, 237-265.

湯川隆子 1983 性役割 三宅和夫他(編) 波多野-依田児童心理学ハンドブック, 金子書房, 251-263.

湯川隆子 1995 性差の研究 柏木恵子・高橋恵子編著 発達心理学とフェミニズム, ミネルバ書房, 116-140.

### Appendix Bem Sex- Role Inventory

男性的項目	女性的項目
自分の意見を通す	愛情深い
独立している	思いやりがある
自己主張が強い	人の気持ちをくみとれる
強い	相手の気持ちがよくわかる
押しが強い	情け深い
人を指導する力がある	いたわりの気持ちがある
一か八かやってみる	心が暖かい
支配的である	やさしい
はっきりした立場をとろうとする	子供好き
非常に積極的である	おだやかな
自立している	人の言いなりになる
力強い	朗らか
分析力がある	内気な
すぐに決められる	おだてにのりやすい
人に頼らない	忠実な
個人主義的な	話し方が柔らかい
男らしい	だまされやすい
競争力のある	無邪気な
野心のある	きつい言葉は使わない
いつも人の先頭に立つ	女っぽい

### Summary

The relationship between psychological androgyny and successful aging in old adults was investigated. Twenty males and 10 females aged from sixty-one to eighty-seven were interviewed to respond to three types of questionnaires. First type of questionnaire was consisted of three scales, i.e., Health, Life-Satisfaction, and Self-Esteem. Second type was consisted of Bem's Sex-Role Inventory (BSRI). Finally, they were asked to recall freely their own past life as a male or a female. The results were as follows; (1) About half the number of males and females were classified into androgynous type, i.e., "Type-MF". (2) The androgynous old adults showed significantly higher score on Health scale than the other three types of gender trait (Type-M, Type-F, Type-U). (3) But, they did not have higher score on Life-Satisfaction and Self-Esteem scales. Above all, these results did not show clearly the predicted relationship. But, case studies based on free recall of their past life suggested that a number of androgynous persons were in the process of successful aging. These results were discussed from the view point of life-span development.